

恩師が紡いでくれた縁。当時最年少メンバー



文化がみの〜れ物語制作委員会

川末圭太さん

みの〜れと共に生活するスタイル
Minole Life
のすすめ

No.178

みの〜れをすっぽり包み込むように大きく育った木々。爽やかな風がみずみずしく茂った葉っぱを揺らしています。ケヤキは1年で1mくらい成長して30年経った頃から太り、その後はのんびりと1年で1mmくらい育つそうです。11月3日、みの〜れは20歳になります。20年前、高校の恩師に推薦されて文化がみの〜れ物語制作委員会のメンバーになり、最年少で活躍した、笠間市にお住まいの川末圭太さん取材します。

学生時代の社会経験に

文化がみの〜れ物語に関わるきっかけは、恩師からの誘い。中央高校でハンドボール部や生徒会で活動していた川末さんは、ハンドボール部の顧問で演劇ファミリーM YUメンバーの筑内雅明先生から、卒業後に文化がみの〜れ物語制作委員会を紹介されました。「パソコンに詳しいことを期待されたんだと思います」と川末さん。このような活動は初めてで分からないことが多く、「不安が大きい中、手探りで活動を始めました」。

大学に進学して埼玉県越谷市に住んでいた川末さんは、2002年7月、大学2年生の時に、本づくりのウェブサイトでメーリングリストを立ち上げ、卒業する

まで管理を続けました。みの〜れに関わった人たちが、週替わりでコラムリレーを担当。試行錯誤しながら閲覧者が増えるよう工夫していました。「当時はツイッターやインスタグラムもなく、自分なりにいろいろ考えてやっていたんだなど、今になって思います」と感慨深げ。

川末さんは、活動を通して社会で活躍している人の考え方に触れた経験を生かし、就職活動時の面接で文化がみの〜れ物語を作ったことをアピールしたところ大変興味を持たれ、採用に至ったそうです。東京で就職して数年後には札幌へ転勤。子育てのことも考えて30歳で地元に戻ってきました。「親孝行にもなっていますかね」と笑顔。

「みの〜れ誕生から20年、月日は早いなあと感じます。みんなが苦しんで生み育て

たことが大正解だった、と今の歳になってしみじみ感じます」。みの〜れの近くを通りかかることはあっても、中まが入って来たのは10年ぶり。木々が大きくなって驚いたそうです。「20年前に思い描いていた、森の中の文化センターになってきましたね」と懐かしそうに当時を振り返ります。

今回の取材がきっかけで、社会に出る前のフレッシュな気持ちやガッツを改めて思い出したそう。「過去を見つめ直す機会をつくってくれたことに感謝します」と笑顔で話してくれました。

恩師の筑内雅明先生も出演する、みの〜れ20歳記念住民ミュージカル「黄色い袋と魔法のトンネル」。「子どもと一緒に観に来ます。楽しみにしています」と川末さん。皆さんもぜひお楽しみに。

(藤田佐知子)